《中学生の部》

「介護施設での出来事」

有田市立箕島中学校　2年
佐津（さつ）　由都（ゆうと）　さん

私は、六月に中学校の職業体験で介護施設に行きました。私の通っている中学校では、二年生になると、職業体験を行います。私は、正直なところ、さほど福祉や介護に興味があったわけではありません。いくつか希望を出した中の一つが介護施設だったというだけで、第一希望は別の職業体験でした。第一希望が外れた私は、その当日を迎えるまで特に思い入れも、意気込みもなく安易にかまえていました。

私がお世話になった介護施設には、話せる人だけでなく、言葉の不自由な方や、車いすの方、寝たきりの方もいらっしゃいました。私は今まで、介護というものを間近で感じたことがありません。家族に介護を必要としている人もいないし、職業として携わっている人もいません。近くに祖母と曾祖母が住んでいますが、八十八歳になる曾祖母も介護の必要もなく元気に過ごしています。曾祖母の家で集まっての食事の時は、決まって焼き肉です。さすがに八十歳を過ぎてからは、牛肉は食べにくいと言ってウィンナーを選んだりしますが、耳も遠くないし、トイレも自分で行きます。

介護施設での初日、言葉の不自由な老人が私に向かって何かを訴えているように思えましたが、私は、どうしていいのかわからず、消極的にうなずくのが精一杯でした。職員の方は、戸惑う私たち中学生にとても親切にして下さいました。私達に親切にしてくださったのは職員の方だけではありません。患者さんの中でも、話せる方はみなさん優しく教えてくださいました。

食事のお世話をさせていただいた時は、これが食べ物なのかと違和感を覚えました。見た目も、においも私が毎日、口にしているものとはまるで違っていました。必要な栄養がそれには足りているのだろうけれど、もう少し工夫がされたら、もっと喜んで食べてくれるのではないかと思いました。

床ずれの手当の時は、最初は足がすくみました。しかし、二日目になると床ずれの具合が心配で自分から行動せずにはいられなくなりました。

二日目の朝に、私達は聞かされました。私達が初日を終えた後、一人の患者さんの容態が急変し、その夜に亡くなったことを…。三日間よろしくお願いします、とあいさつをして、職業体験に消極的だった私の背中を暖かい眼差しで優しく押してくれた、

その初日に…。たった三日間の職業体験だけれど、それでもまだ二日間あるのだと、私が思っていた時に亡くなったのです。

介護施設での三日間は、私にとって一生忘れられないものとなりました。三日間というよりは、一日一日が、一時一時が貴重で尊いかけがえのない時間となりました。時間には限りがあること、そこには命があって生きているということ、終わりがあるということ、介護施設での体験がなければ、私には考えることも感じることもなかったことだと思います。私は感謝と強い後悔から、自ら積極的に行動しなければいけないと感じました。